



TITLE:

メチエ語の名詞句構造の概要

AUTHOR(S):

桐生, 和幸

CITATION:

桐生, 和幸. メチエ語の名詞句構造の概要. シナ=チベット系諸言語の文法現象1: 名詞句の構造 2016: 113-129

ISSUE DATE:

2016-03-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/245157>

RIGHT:

メチェ語の名詞句構造の概要

桐生 和幸

1. はじめに

本稿で取り上げるメチェ語は、図1で黒で示したように、ネパール東部ジャパ群で主に話されている言語である。メチェ語は、チベット＝ビルマ語族のボド・ガロ語支に属し、ボド語群と呼ばれる言語群のボド語の一方言である。ボド語群には、ボド語以外に、コックボロック語、ティワ語、ディマサ語などが属する。ボド族は、インド・アッサム州東部から西ベンガル州にかけて居住する民族であり、ネパールのメチェもボド族である。

A map of Nepal



図1 ネパールの地図とメチェ語の言語地域 (Meche & Kiryu 2012)

19世紀末から20世紀初頭にかけてのころには、アッサム州のカムルップから東にかけて居住していたボド族は Kachari (カチャリ,あるいは, コサリ) と、アッサム州ゴアルパラから西、および、スンコシ川を渡って西ベンガルからネパールに至る地域のボド族は、Mech (メチュ, メス) と外部から呼ばれていた (Endle 1901 の地図)。しかし、現在では、インド側はすべて英語表記では Bodo と呼ばれる。実際の発音は、西ベンガル州では [boɔ̯o] であり、アッサム州では, [boro]

である。そのため、アッサムでは、英語表記は **Boro** (以下ボロ語) とされる場合がふつうである。**Meche** (メチェ) という呼称は、ネパールにおけるボドの外的呼称であり、自称はやはり [boɖo] である。**-e** は、ネパール語の形容詞や民族名を作る時の語尾である。現状、ネパールでボドというと、インドのボドを指すものと解釈されるので、本稿でも、ボドとは呼ばずに、メチェと呼ぶことにする。

メチェ語は、西ベンガル州のボド語とは、かなり近い方言関係にあり、お互いに問題なく通じる。また、民族的にも婚姻関係での交流が国境を超えて見られる。それに対してアッサム州のボロ語とは、全く通じないわけではないが、発音、語彙、文法の点で少なからずの違いが見られ、相互理解率も人によって異なるものの、50 パーセントから 60 パーセント程度である。Kiryu (2012) では、西ベンガル州のボド語とネパールのメチェ語をボド語西部方言とし、アッサム州のボロ語をボド語の東部方言として区分することを提案した。

メチェ語は、2011 年の国勢調査によると、人口 4867 人、話者数 4375 人と報告されている。メチェ族の若者の多くが、中東の湾岸諸国やマレーシアへ出稼に出ており、この統計に含まれていないとすると、実際の人口と話者数は大幅に増えることが見込まれる。

メチェ語は、言語類型的には多くのチベット=ビルマ系言語と同様、基本語順が主要部後置型の SV, AOV, GN, RelN, AN/NA となる。また、格体系は主格対格型で、人称変化が動詞には存在しない。メチェ語は、高低の声調の区別が見られる。母音は、/a, i, u, e, o, ə/ の単母音と /ai, au, ui, eu, əi, əu/ の 2 重母音がある。また、子音は /p [p/ɸ], b, t, d, k, g, m, n, ŋ, c [ts/ʈ], j [ɕ/z/ɕʒ], r [r], l, w, h, s [s/ʃ]/ である。基本的に、無声破裂音は氣息を伴う。

2. メチェ語名詞句の内部構造

2.1. 名詞の特徴

ある種の名詞は、語構成的に規則的に形成される。親族名詞、動物、植物を表す名詞の一部は、共通する接頭辞を備えており、ある種の意味クラスを形成している。

親族名詞の一部は、その中核となる形態素は、**bəu** 「祖父」、**bəi** 「祖母」、**pa** 「父」、**ma** 「母」、**da** 「兄」、**bo** 「姉」のように 1 音節語であるが、単独では語として成り立たず、人称代名詞に由来する接頭辞が付くことで、人称ごとの区別のある親族名詞になる。話者の親族については、接頭辞 **a-** が付属し、聞き手の親族については、**nəŋ-** が付属し、それ以外の親族については、**bi-** が付属する。よって、例えば、自分の父親は **apa** となり、聞き手の父親は **nəŋpa** となり、それ以外の父親は **bipa** となる。**bi-** の付く形は、誰の親族という意味なく、一般的な親族を表

す場合に、いわゆる無標の接頭辞のように機能することもできる。

この *bi-* は、後でも出てくるが、名詞を形成する場合に、無標の接頭辞として付属するパターンが多くある。親族名称に限って言えば、子どもは *sa* であるが、単独では単語として成り立たないので、*bi-* をつけることで *bisa* という単語が成立する。*sa* は、家禽の子どもや指小辞的にも働き、*oma-sa* 「豚の子ども」、*dau-sa* 「ひよこ」、*dəi-sa* 「川+子=小川」のような単語を形成する。

3 種類の接頭辞が付く親族名称は、現状把握できている範囲では、上にあげた話者自身より年長の親族を指す場合に限られるようである。弟は *pongbai* であり、妹は *binanau* と *bi-* が付くが、その他の接頭辞は付かず、派生的な名詞ではない。

動植物を表す名詞の一部は、そのクラスを表す形態素が共通して語の先頭につくという特徴が見られる。鳥の一部は、*dau* という形態素で始まる。*dau* 自体は、単独で語となり、「鶏」という意味である。しかし、鳥一般をさす語やそのほかの鳥をさす名詞は、表 1 のように *dau* で始まるものが多い。

<i>daucen</i>	鳥一般	<i>daukatak</i>	ヤツガシラ
<i>dauka</i>	ハシブトガラス	<i>daukadan</i>	インドブッポウソウ
<i>daunatud</i>	カワセミ	<i>daubo</i>	コサギ
<i>dauto</i>	ハト	<i>dauwaŋ</i>	オオサイチョウ

表 1 *dau* で始まる鳥類

また、動物の多くは、表 2 のように、*mə-* という接頭辞を取る。

<i>məca</i>	トラ	<i>mətam</i>	マングース
<i>məpur</i>	熊	<i>məteka</i>	ムササビ
<i>məkra</i>	猿	<i>mədəi</i>	ヤマアラシ
<i>məsəu</i>	雄牛	<i>məpəu</i>	イグアナ
<i>məcəi</i>	キョン、四つ目鹿		

表 2 *mə-* で始まる動物

mə- で始まる語には、*məcram* 「蟻」、*mədəi* 「神」のように動物でないものもある。また、*məisə* 「水牛」、*məided* 「象」のように *məi-* で始まるものもあるが、*məi* 自体は「鹿」という意味である。

また、根菜類は、*taguna* 「甘芋」、*tasumbli* 「タピオカ芋」のように、つる性の芋のなるものには、*ta-* という形態素で始まる。

このように、メチェ語における名詞は、共通する形態素を含むものがあり、それが一つの意味的なまとまりをなしている。その他の名詞は、形態的に共通性は見られない。

2.2. 名詞句の内部構造

メチェ語の名詞句は、(1) に示すような内部構造を持つ。

- (1) [指示詞] [数詞＋類別詞] [形容詞] 名詞 [形容詞] [数詞＋類別詞]
[格標示]

指示詞は名詞句の先頭に、格標示は名詞句の一番最後に来る。類別詞句と形容詞は、名詞の前にも後ろにも来ることができる。

2.3. 指示詞

メチェ語の指示詞は、be「この・これ」と bi「その・それ、あの・あれ」とがある。この二つは、単独で項として機能することもできるし、名詞を修飾することもできる。

- (2) a. be bima-bisa mæca nə gumbai-bai-yə, ma.
この 母-子 虎 EMPH 放牧する-回る-HAB 何
なんと、この虎の親子が[牛を]放牧して回らせたのです。

- b. mæca=ya bi gai=ya=kəu wat=nə.
虎=NOM その 牛=DF=ACC 噛む=DAT
虎はその牛に噛みつくために[行った]。

2.4. 形容詞による修飾

2.4.1. 形容詞と名詞の位置関係

メチェ語の形容詞は、名詞を前から、または、後ろから修飾できる¹。しかし、限定的修飾の場合は、通常前から修飾するのが自然である。インフォーマントに aŋ=kəu ____ labə.「僕に____を持ってきて。」という文にそれぞれのボタンを当てはめ提示し、判断をしてもらおうと、以下のようになった（✓✓: もっと自然, ✓: 自然, ?? : 不自然, とする）。

- (3) a. ✓✓ məjaŋ bitai b. ✓ bitai məjaŋ (質)
良い 果実 果実 良い
良い果実 良い果実

¹ Burling (1983) が Sal languages と呼ぶボド・ガロ語支の他の言語でも、形容詞の名詞句内での位置は、自由である可能性が高い。Sal languages の一つであるラバ (Rabha) 語については、Joseph (2007:307) が形容詞と類別詞句の名詞句内での語順はかなり自由であると報告している。

- (4) a. ✓✓ geded bitai b. ✓ bitai geded (大きさ)
 大きい 果実 果実 大きい
 大きな果実 大きな果実
- (5) a. ✓✓ gəcəm bitai b. ✓ bitai gəcəm (色)
 黒い 果実 果実 黒い
 黒い果実 黒い果実
- (6) a. ✓✓ golgol bitai b. ?? bitai golgol (形状)
 丸い 果実 果実 丸い
 丸い果実 丸い果実

インフォーマントがはっきりと不自然だと答えたのは、(6b) の場合だけであった。なぜこの場合だけ、不自然と言う反応となったかは現時点では不明である。

以下では、実例およびチェック済みの作例からそれぞれの語順パターンをあげてみる²。まずは、geded (大きい) と gopot (白い) の語が AN/NA 両パターンで現れている実例のペアである。

- (7) a. [AN]
 dudun geded geded la-nanəi hagra=u ka-nan dən-əi-kha.
 縄 大きい 大きい 取る -CP 森=LOC 結ぶ -CP 置く -DST- 必ず
 大きな大きな縄を持って行って、必ず森に [牛を] つないでおいといで。
 (『ドゥッドビール・ドゥドゥビールの話』)
- b. [NA]
 həit, pəi-naiŋŋa³. geded dudun=jəŋ ka-ka-dəŋ aŋ.
 おい 来る -NEG.FUT.EMPH 大きい 縄=COM 結ぶ -必ず -CONT 1SG
 ふん、[牛が戻って] 来るわけない。大きな縄で確かに結わったって
 んだ。(『ドゥッドビール・ドゥドゥビールの話』)
- (8) a. [AN]
 be gopot gorai=ya=kəu hot=cai.
 この 白い 馬=DF=ACC やる=促し
 この白い馬を頂戴な。(『ドゥッドビール・ドゥドゥビールの話』)

² 採録した物語からのものは、その物語名を日本語訳の後に付す。何もない場合は、チェック済みの作例である。

³ -naiŋŋa は、本来は =nai əŋ-a [=NMLZ COP-NEG.NONPST] と形態素分析できるが、全体として強意的な非過去否定接辞に文法化していると言える。また、名詞化辞自体が、未来を表す時制接辞としても文法化している。例えば、taŋ-nai で「行く - 未来」という意味になる。

b. [N A]

əu, kəla kona=jəŋ hai, daubo gopot=na bir-dəŋ.
 うん 南 方角=COM FOC 白鷺 白い=NOM 飛ぶ-CONT
 おお、南の方へな、白い鷺が飛んでいた。(『アイバリクングリ』)

以下には、AN/NA の語順のペアでは見つからなかったが、それぞれの例を挙げる。

・ AN の例

- (9) jəŋ gərib mansi, hənəi!
 IPL 貧しい 人間 見ろ

ご覧のとおり、私たちは貧しい身。(『ドウッドビール・ドウドゥビールの話』)

- (10) muke slok, gəlau slok=ŋa judi kənaçəŋ-nai həŋ-bla, mane,
 大きな 物語 長い 物語=DF もし 聴く-FUT 言う-なら FIL
 məkra bir=ni cələŋ-nagəu.
 猿 勇敢な=GEN 習う-義務

偉大な物語、長い物語をもし聞くと言うならば、さて、「勇敢な猿」のを習わなければならんな。(『勇敢な猿の話』)

- (11) ayəi, ma ece gusu dəi!
 INTJ 何 少し 冷たい 水

ああ、なんて冷たい水なんだ。

- (12) bi gəjam bucula gaŋ-dəŋ.
 3SG 古い 服 着る-CONT

彼は、古い服を着ている。

・ NA の例

- (13) e, məjaŋ-əi susa-nanəi hai dəi gətar dəikor=niprai
 おい きれいに-EMPH 拭く-CP 方 水 清い 井戸=から

labə-nanəi, hə-pəi.
 持って来る-CP やる-くる .IMP

おい、きれいに拭いてから、きれいな水を井戸から汲んで来ておやり。
 (『ドウッドビール・ドウドゥビールの話』)

- (14) bi mai bidan gəlau labə-nai.
 3SG 稲 束 長い 持ってくる -FUT
 彼は長い稲の束を持って来る。

上述のように、基本的に名詞句内での形容詞の語順は主要部名詞の前でも後ろでも問題ないが、ある程度語彙化されている以下のような表現は、主要部名詞より後に来る NA の語順を取るのが自然である。

- (15) a. hinjau gədan b. hinjau gibi c. hinjau goto
 新婦 一番目の妻 一番下の妻

2.4.2. 複数の形容詞の語順

前節では、単一の形容詞が名詞を修飾する場合の名詞句内での語順を考察した。名詞句内に複数の形容詞が存在する場合、その語順について一定の法則性があることが知られている。Sproat & Shih (1991) は、以下のような形容詞の意味クラスに応じた語順を提案している。

(16) Adjective Ordering Restrictions (AOR)

Quality > size > shape > color > provenance (Sproat & Shih 1991)

収録データからは、2 つ以上の形容詞が連続している例を 1 例だけ見つけることができた。

- (17) be, həəə hən-nan bir-bai-yə na bir-bai-ya?
 これ ONOM 言う -CP 飛ぶ - 回る -HAB か 飛ぶ - 回る -NEG.HAB
 geded, geded ja-yə, geded gəcam.
 大きい 大きい COP-HAB 大きい 黒い
 こいつは、ブーンと言って飛ぶんだったかな？ 大きいやつ。大きくて黒いやつ。

この例では、AOR の語順に従っている。

これに加えて、作例による 2 語形容詞による語順パタンの容認性をインフォーマントに確認した。基本となる形容詞の語順は、以下のものである。

- (18) 1 2 3 4
 məjan geded golgol gəcam entai labə.
 良い 大きい 丸い 黒い 石 持ってくる .IMP
 良い大きい丸い黒い石を持ってこい。

メチェ語では、Provenance に当たる形容詞がない⁴ため、それ以外の 4 つの形容詞について、2 つずつ相対的な語順について調べた。その結果、 $1 > 2 > 3 > 4$ の語順の階層性が認められ、AOR に従う語順がもっとも自然であった。つまり、相対的な語順は、 A_1 を階層の上の形容詞（小さい数字）、 A_2 を階層の下形容詞（大きい数字）とすると、必ず、 $A_1 A_2 N$ の順で並ばなければ容認されないということである。

興味深いことに、主要部名詞の左右に 2 つの形容詞を配置した場合、階層性にかかわらず ANA という語順は許容されなかった。また、NAA という語順で確認した場合、 $NA_2 A_1$ とミラーイメージとなるもののみが、許容された⁵。

2.5. 数量類別詞による修飾

メチェ語には、数量類別詞が豊富に存在する。少なくとも Meche & Kiryu (2012) には、約 100 の類別詞が挙げられている⁶。メチェ語の数量詞は拘束形態素で、1 ～ 5 までの数字がつく。6 以上は、インド＝アリア語由来（ベンガル語・ネパール語）の数詞と類別詞の組み合わせで表される。この場合の類別詞は、人の *jən* とそれ以外の *ta* のみである。表 3 に類別詞の例を挙げる。

また、表からも明らかな様に、メチェ語の類別詞句内の語順は、数詞が 1 から 5 までは Clf-Num の語順となるが、6 以上の場合、Num-Clf の語順となる。メチェ語固有の順は、Clf-Num だと思われる。後者の語順は、借用しているベンガル語・ネパール語での語順が Num-Clf であることから、語彙だけでなく、形態統語的な特徴も合わせて借用している状況がうかがえる。

類別詞句は、名詞句内で形容詞同様名詞の前 (19) にでも後ろ (20) にでも置くことができる。

(19) [Clf N]

gələɪɡlam = ma = kəu buŋ-naini mən-ce kəta doŋ na ɡəiɪa?
 子供 -DF-ACC 言う -NMLZ CLF-I 話 ある か ない .NONPST
 直訳：子供たちに語ってきた 1 つの話がありますか、ありませんか。
 意訳：子供たちに語り継がれてきたお話が何か一つありませんか。（「Gala Meche interview」）

(20) [N Clf]

oho, bəhai hinjau sa-ce doŋ-ŋə lai.
 あれま ここに 女 CLF-I いる -HAB よ
 あれま、ここに女が一人いるよ。

⁴ nepal=ni のように場所名詞 + =ni（属格）で表される。

⁵ ただし、enthai golgol geded ($A_2 A_1$) は、許容されなかった。

⁶ ネパールの言語の中で、豊富な数量類別詞を持つのはネワール語とメチェ語のみ（Kiryu 2009）。

数	数詞	例 (人)	例 (動物)	例 (物)	例 (キロ)
1	-ce	sa-ce	ma-ce	mən-ce	ser-ce
2	-nəi	sa-nəi	ma-nəi	mən-nəi	ser-nəi
3	-tam	sa-tam	ma-tam	mən-tam	ser-tam
4	-brəi	sa-brəi	ma-brəi	mən-brəi	ser-brəi
5	-ba	sa-ba	ma-ba	mən-ba	ser-ba
6	cəi-	cəi-jən	cəi-ta	cəi-ta	cəi-kilo
7	sat-	sat-jən	sat-ta	sat-ta	sat-kilo

表 3 メチェ語の数量詞と類別詞

形容詞の場合もそうであるが、修飾要素が主要部名詞より後ろについた場合、格標識やディスコースマーカ⁷は (21) や (22) のように名詞句全体の最後尾に現れる。

(21) [N Clf]=CASE

bi udəi tai-ce = kəu lai cər tə pəsi-nai?
 その 腹 CLF-I=ACC FOC 誰 一体 養う -FUT

直訳：その腹を1つ、誰が一体養うってんだ。

意訳：そいつを一体誰が養うってんだ。(『ドゥッドビール・ドドゥビール』)

(22) [N Clf]=DF (ディスコースマーカ)

daucen ma-ce-yan gautat-nə ha-ya = bla, ma
 鳥 CLF-I-DF.EMPH 打ち殺す -SUB できる -NEG.NONPST=時 何
 tə sikar gele-nə pəi-dəŋ?
 一体 狩り 遊ぶ -SUB 来る -CONT

鶏を1羽でさえもしとめることができないなら、何の狩りに来ているんだい？ (『勇敢な猿の話』)

2.6. 修飾要素どうしの順番

以上、名詞を修飾する指示詞、形容詞、類別詞の名詞句内での位置を見てきた。指示詞は必ず初めに表れるが、それ以外の要素は、順番が必ずしも定まっていな

い。以下に、それぞれの要素が現れている例を示す。
 以下の (23) から (26) までは、指示詞 (Dem) と形容詞 (A) ・ 類別詞 (Clf) が組み合わさった場合の実例である。

⁷ ディスコースマーカ (DF) は、=a という形態素で表され、基本的に主格標識と同形態である。二項動詞の動作主項 A に現れる場合は、主格とみなし、被動者項 O に現れる場合は、DF とみなしている。DF は、その後ろに対格標識 =kəu も取ることができる。DF の基本的な機能は、ディスコース中で被動者項が一貫して焦点となっているような場合に現れる。(22) の例では、鳥を仕留めることができるかというのが、話の焦点となっているので、DF が付いている。

(23) [Dem A \overline{N}]

əmpəne, be gopot gorai = ya = kəu hot-cai.
 それから この 白い 馬 =DF=ACC やる - 促し

それから, この白い馬を頂戴な。(『ドゥッドビール・ドゥドビール』)

(24) [Dem \overline{N} A]

bi mai bidan̄ gəlau labə-nai.
 3SG 稲 穂 長い 持って来る -FUT

彼は稲穂の長いのを持って来る。(DIC : labə の例文)

(25) [Clf \overline{N}]

bi ban-ce bon labə-aʔ.
 その 束 -I 薪 持って来る -PST

その一束の薪を持ってきた。(DIC : ban の例文)

(26) [\overline{N} Clf]

bi udəi tai-ce = kəu lai cəɾ-tə pəsi-nai?
 その 腹 CLF-I=ACC EMPH 誰 -Q.EMPH 養う -FUT

直訳: 誰がその腹を一つ養うっていうんだい。

意識: 「誰がその [新しい] 食い扶持を養うっていうんだい。(『アイバリクングリ』)

指示詞・類別詞, 形容詞がすべて組み合わさった場合はどうなるであろうか。Greenberg は, これらの要素の配列について, 以下のように Universal 20 を挙げている。

- (27) *Universal 20*: When any or all of the items (demonstrative, numeral, and descriptive adjective) precede the noun, they are always found in that order. If they follow, the order is either the same or its exact opposite. (Greenberg 1963: 87)

しかし, Hawkins (1983:119) は, 名詞の後ろに修飾要素が来る場合, もっとも多いのは, Dem Num A N のミラーイメージに当たる語順ではあるが, Universal 20 に従わない例もあるとして反論している。Cinque (2005) は, 生成文法の枠組みで分析を行い, 移動が伴わない場合のマージ後の構造は Dem Num A N であるが, NP が上に位置する Agr の Spec を移動して行くことで異なった語順が得られ, この移動および pied-piping によって, 可能な語順と不可能な語順とを予測するとしている。詳しい分析については立ち入らないが, Cinque の分析では, 4 つの要素の自由配列による組み合わせは 24 通りあり, その内可能なものは 14 通

りであるとしている。

本稿では、これまでの調査において、この 24 のパターンについて調査票による聞き取りを通じてメチェ語の名詞句内での要素の語順を探った。その結果、(28)に挙げるような 6 つのパターンが容認可能なものとして認められた。以下、Num にあたるものは、Clf として示している。

(28) a. パタン 1 [Dem Clf A \overline{N}]

be	tai-tam	məjaŋ	taijəu = kəu	aŋ	laŋ-nai.
この	CLF-3	良い	マンゴー=ACC	1SG	持って行く -FUT

僕はこの 3 つの良いマンゴーを持って行く。

b. パタン 2 [Dem A Clf \overline{N}]

be	məjaŋ	tai-tam	taijəu = kəu	aŋ	laŋ-nai.
この	良い	CLF-3	マンゴー=ACC	1SG	持って行く -FUT

? 僕はこの良い 3 つのマンゴーを持って行く。

c. パタン 3 [Dem A \overline{N} Clf]

be	məjaŋ	taijəu	tai-tam = kəu	aŋ	laŋ-nai.
この	良い	マンゴー	CLF-3=ACC	1SG	持って行く -FUT

僕はこの良いマンゴー 3 つを持って行く。

d. パタン 4 [Dem Clf \overline{N} A]

be	tai-tam	taijəu	məjaŋ = kəu	aŋ	laŋ-nai.
この	CLF-3	マンゴー	良い=ACC	1SG	持って行く -FUT

* 僕はこの 3 つのマンゴー良いを持って行く。

e. パタン 5 [Dem \overline{N} A Clf]

?be	taijəu	məjaŋ	tai-tam = kəu	aŋ	laŋ-nai. (cf. e.g. (30))
この	マンゴー	良い	CLF-3=ACC	1SG	持って行く -FUT

* 僕はこのマンゴ良い 3 つを持って行く。

f. パタン 6 [Dem \overline{N} Clf A]

be	taijəu	tai-tam	məjaŋ = kəu	aŋ	laŋ-nai.
この	マンゴー	CLF-3	良い=ACC	1SG	持って行く -FUT

* 僕はこの 3 つのマンゴー良いを持って行く。

パタン 1 は、Greenberg の Universal 20 で必ず現れるパターンとして挙げられているもので、かなり多くの言語がこのパターンを示すことが分かっている (Cinque 2005)。

興味深いことに、Greenberg でも Cinque でも unattested とされている Dem A Clf(=Num) N が、パターン 2 (28b) のように可能であることが分かった。Cinque (2005:fn2) は、この語順について Alamlak (Croft & Deligianni 2001) や Mongolian (Whitman 1981) でも認められることに言及している。しかし、この語順は merge error として排除されるとしている。表面的にこの語順を取るのは、A が attributive ではなく reduced relative clause (RCC) type の場合であり、また、この語順を許す言語でも、パターン 1 の Det Num A N の語順も同時に許すことから、Cinque の仮説に対する純粋な反例になるのは、パターン 2 の Det A Num N の語順しか許さない言語が見つかった場合に限ると主張している。この点からすると、メチェ語自体は、Cinque の枠組みに対する反例とはならない。しかし、メチェ語の形容詞が attributive なのか、RRC なのかについては、一考の余地がある。

メチェ語の名詞を修飾する形容詞が reduced relative clause なのかについては、現時点では十分な検証ができないが、その可能性は否定できない。もともと、形容詞のうち初頭子音が g で始まるものの多くは、動詞に gV- (V は任意の母音) という接頭辞をつけて形成される。この gV- は、他の TB 言語では名詞化辞として考えられている。また、TB 諸語の多くは、ネワール語のように名詞化辞がそのまま relative clause 的に連体修飾する機能を持つ。しかし、メチェ語の gV- は、節を名詞化することはできず、動詞を形容詞化するに過ぎない。生産的な名詞化辞は、後述のように接尾辞である。

また、メチェ語の形容詞を reduced relative clause (RRC) とするには、問題となる点が一つある。RRC は、他の RRC に対する語順は固定されておらず、上述の Cinque の反論は、この事実に依拠したものだと言える。語順が固定されているのは、attributive adjective の特徴だからである。2.4.2 節で形容詞の語順を見たように、形容詞自体の語順は定まっており、RRC というよりは attributive adjective の特徴を備えている。もし、メチェ語の形容詞が attributive adjective であり、かつ、Greenberg や Cinque の排除する語順が問題なのだとすれば、典型的に大変興味深いと言える。しかし、現時点では、このパターンについては、聞き取り調査からしか得られておらず、自然発話の例が存在しない。また、聞き取りパターンも時間の関係からここで取り上げたパターンしか調査していない。今後、異なる形容詞や類別詞の例を複数作成し、再調査を行ったうえで結論を導き出す必要がある。

さて、パターン 3 からパターン 6 は、すべて Cinque (2005) の枠組みでも派生される語順である。パターン 5 には、疑問符を 1 つつけているが、これは、インフォーマントがやや不自然かもしれないという反応を示したものである。しかし、(30) で示した採録データには、Dem はないもののこの語順が許容されるものが存在する。

自然発話からの実例では、指示詞付きの例はほとんどなかったが、メチェ語では、指示詞は必ず先頭につくので、それを除外した例では、パターン 1, 2, 3 以外が見つかった。以下に示す。

(29) パタン 4 [Clf $\overline{\text{N}}$ A]

mən-ce cəuri gedet doŋ nə.
CLF-I 草原 大きい ある HEARSAY

ひとつ大きな草原があったそうな。

(30) パタン 5 [$\overline{\text{N}}$ A Clf]

gənəi taŋ-nanəi para=u hai nagri-bai-nanəi hai gorai
それから 行く -CP 村=LOC 方 探す - 回る -CP 方 馬
gopot ma-ce bai-nan la-i-bai, bicər.
白い CLF-I 買う -CP 取る -DIST-PFT 3PL

で、行って、村の方で探して、白い馬一頭買って持って行ったんだ、二人は。

(31) パタン 6 [$\overline{\text{N}}$ Clf A]

waʔ mən-ce gəlau dan-nanəi, hicri katot-nanəi waʔ
竹 CLF-I 長い 断つ -CP ボロ布 巻く -CP 竹
bijəu hai laŋ-də.
先端 方 持って行く -IMP.HON

竹の長いのを一本切って、ぼろきれを巻いて、竹の先端にね、それで持ってって。

3. 連体節による修飾

次に、連体節による修飾パターンを考察する。メチェ語では、動詞を主要部とする節が名詞を修飾する場合、節全体が名詞化される。名詞化辞は、テンス・アスペクト (TA)、否定によって動詞の後につく形式が異なり、表 4 で示すように 4 つに分かれる (Kiryu 2008)。肯定の場合はアスペクト・時制の対立が見られるが、否定ではその区別が中和される。

また、連体修飾節の位置は、形容詞や類別詞の場合と異なり、名詞の前からのみ可能である。

T A \ 肯否	肯定	否定
習慣	-gra	-yi
未来	-nai	
完了・過去	-nai(ni)	

表 4 メチェ語の名詞化辞の体系

3.1. -gra による連体修飾

-gra は、述語が関係する必須項あるいは非必須項を指し、generic/habitual に対応する意味を述語に持たせる機能がある。非修飾名詞の連体修飾節内の意味役割に特に制限はない。

- (32) cin-gra mansi nangri-nagəu ja-bai.
 切る -NMLZ 人 探す - 必要だ なる -PFT
 [木を] 切る人を探さなければならなかった。(『雀のおじさん』)

- (33) a. ja-gra mənŋa
 食べる -NMLZ もの
 食べ物 (被動者)・食べるための物 (道具)

- b. india taŋ-gra lama
 インド 行く -NMLZ 道
 インドへ行く道 (経路)

3.2. -nai による連体修飾

-nai は、命題をコトに変換する名詞化辞である。

- (34) gəra geded nə. ja-nai ləŋ-nai gan-nai,
 旦那 大きい HEARSAY 食べる -NMLZ 飲む -NMLZ 着る -NMLZ
 jum-nai, pura doŋ.
 羽織る -NMLZ 全部 ある
 [かれは] 大金持ちだったとさ。飲食するものも、身にまとうものも、なんでもそろっていた。

-nai によって名詞化された述語動詞が非埋め込みで定動詞の位置に立つ場合、未来の動作を表す。この用法は、西ベンガル州のボド語とネパールのメチェ語に見られ、アッサム州の東ボド方言には基本的でない用法である。

- (35) gabən taŋ-nai, nəŋ?
 明日 行く -FUT 2SG
 あんた明日行くかい？

しかし、連体修飾節では、基本的に未来の意味にはならず、過去に起こったこと、パーフェクト的な事態を表す連体修飾節になる。

- (36) lum ja-nai somai = au nai-nanəi nəŋ geded gun kəcam-bai.
 熱 なる -NMLZ 時 = LOC 見る -CP 2SG 大きい 好意 する -PFT
 病気になった時に世話してくれて、君は非常に良くしてくれた。

しかし、文脈で解釈が強制されれば、未来の動作を表すこともありうる。

- (37) gabən taŋ-nai lama = ya honai be.
 明日 行く -FUT 道 = NOM あっち これ
 明日行く道はそいつだ。

3.3. -naini による連体修飾

-naini という形式も存在する。これは、名詞化辞 -nai と属格 -ni とが結合した形式で、連体修飾辞としては、完了したこと、過去に起きたことのみを表す。-nai だけの場合と異なり、未来は表さない。

- (38) aŋ bai-naini leka mahai doŋ?
 1SG 買う -NONFUT.NMLZ 本 どこ ある
 僕が買った本はどこにあるの？
- (39) ojai ta-naini cingri = ya aŋ = ni bisajə.
 そこ いる -NONFUT.NMLZ 少女 = NOM 1SG = GEN 娘
 あそこにいる女の子は、俺の娘だ。
- (40) bi aŋ = ni noʔ = au pəi-naini mansi.
 3SG 1SG = GEN 家 = LOC 来る -NONFUT 人
 あいつは俺の家に来ている人だ。

3.4. -yi による連体修飾

-yi は、時制やアスペクトに関係なく、否定の意味を含む連体修飾の時に使われる。

- (41) mənbə gəi-yi mansi
 何も ない -NEG.NMLZ 人
 何にもない人

- (42) gəsə=au san-yi kəta kənacəŋ-nanəi aŋ=kəu bi=yə
 心=LOC 考える -NEG.NMLZ 話 聴く -CP 1SG=ACC 3SG=NOM
 cək kəcəm-bai.
 驚き する -PFT

思いもしなかったことを聴いて、私は彼にびっくりさせられた。

-yi は、過去否定形を表す時制接辞と同形である。

- (43) jəŋ haba gəi-yi mən.
 1PL 仕事 ない -NEG.PST PST
 私たちは仕事がなかった。

しかし、過去否定を表す -yi と連体修飾節に表れる名詞化辞の -yi とは別物として考えても良いかもしれない。例文 (44) では、gəi-ya の動詞句と gəi-yi の動詞句は、パラタクシス的な構造を持ち、全体が名詞化されていると言えるが、最後の動詞のみが、名詞化辞を伴っていると考えられる。つまり、gəi-ya+NMLZ が具現化したものが gəi-yi だと考えることができる。

- (44) aca, nəcər=ne ja=nə gəi-ya ləŋ=nə
 OK 2PL=GEN 食べる =DAT ない -NEG.NONPST 飲む =DAT
 gəi-yi=kəu aŋ pura bənai-nai.
 ない -NEG.NMLZ=ACC 1SG 完全 作る -FUT
 わかった。お前たちには食べるものもない、飲むものもないことを、私が何とかしてやろう。(『アイ・バリクングリ』)

4. まとめ

本稿では、メチェ語の名詞句内の構造について考察を行った。メチェ語では、指示詞と連体修飾節は主要部名詞よりも前にしか現れないが、形容詞や類別詞は主要部名詞の前後に表れることができる。形容詞は、その種類によって語順が固定されており、所謂 *reduced relative clause* というよりは、純粋に *attributive adjective* の特徴を備えている。また、形容詞、類別詞、主要部名詞の配列は自由ではなく、6 パターンしか許容されることが分かった。また、このパターンの 1 つには、Greenberg の Universal 20 に反する Dem A Num (=Clf) N という配列が許容されることが分かり、典型的に興味深いデータと言える。しかし、現時点では、さらに分析が必要で、今後の課題としたい。最後に、連体修飾節についてそのマーカの種類の肯定と否定とでわかれており、テンス・アスペクトの区別が見られるのが肯定の場合だけで、否定の連体修飾節マーカは 1 つしかないことを示した。

略号

ACC：対格，COM：随格，CONT：継続相，CLF：類別詞，COP：コピュラ，
CP：連接辞，CS：状況の変化，DAT：与格，DF：ディスコースマーカ，
DST：離接辞，EMPH：強調，FIL：フィラー，FOC：フォーカス，FUT：未来，
GEN：属格，HAB：習慣相，HEARSAY：伝聞，HON：敬体，IMP：命令，
LOC：所格，NEG：否定，NMLZ：名詞化辞，NOM：主格，NONPST：非過去，
ONOM：オノマトペ，PFT：パーフェクト，PST：過去，SG：単数，SUB：従属
節辞

参考文献

- Burling, Robbins. 1983. "The sal languages". *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 7. 1–32.
- Cinque, Guglielmo. 2005. "Deriving greenberg's universal 20 and its exceptions". *Linguistic Inquiry* 36. 315–332.
- Croft, William, and Efrosini Deligianni. 2001. "Asymmetries in NP word order". *International symposium on deictic systems and quantification in languages spoken in Europe and Northern and Central Asia, Udmurt State University, Izhevsk, Russia*.
- Greenberg, Joseph H. 1963. "Some universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements". *Universals of language*, ed. by Joseph Greenberg, 73–113. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Hawkins, John. 1983. *Word order universals*. New York: Academic Press.
- Joseph, U. V. 2007. *Rabha*. Leiden: Brill.
- Kiryu, Kazuyuki. 2008. An outline of the Meche language: Grammar, text and glossary. Mimasaka University.
- Kiryu, Kazuyuki. 2009. "On the rise of the classifier system in Newar". *Senri Ethnological Studies* 75. 51–69.
- Meche, Santa Lal, and Kazuyuki Kiryu. 2012. *Meche–Nepali–English Dictionary*. Jhapa: The Council of Meche Literature and Language.
- Sproat, Richard, and Chilin Shih. 1991. "The cross-linguistic distribution of adjective ordering restrictions". *Interdisciplinary approaches to language*, 565–593. Springer.
- Whitman, John. 1981. "The internal structure of NP in verb final languages". *Papers from the Seventeenth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, ed. by Roberta A. Hendrick, Carrie S. Masek, and Mary Frances Miller, 17, Chicago: Chicago Linguistics Society, Chicago, 411–418.